

コロマン・モーザー《第一三回分離派展ポスター》についての一考察

— 三人の女性像と幾何学的な形態 —

前田 朋美 (同志社大学)

ウィーン世紀末の芸術家コロマン・モーザー(Koloman Moser : 1868-1918)は、ウィーン分離派(以下、分離派)の第一三回展分離派展(1902年2月1日~3月16日)のポスター(1902)を制作した。本ポスターは、正面向きの三人の女性像と白枠の円、及び幾何学的な形態による構図である。女性像は曲線や雫型の形態を含み、丸みを帯びた文字の形態だが、縦長の形式、垂直と水平の要素、そして三色に限定された色彩により秩序ある洗練された印象を与える。本ポスターは、モーザーが1901年頃に開始する、それまでの植物や髪の毛の多彩な曲線に代わり、幾何学的な形態による抑制されたデザインに取り組み始めた後の代表的な作品と位置付けられている。モーザーや分離派に関する先行研究では、このデザインを評価する一方、展覧会のポスターとしての役割や内容を含めて考察することなく、モーザーによるグラフィック作品の特質もまた見過ごされている。

こうした現状に対してD.ライズマンは構図、文字の種類やポスターとしての機能を取り上げ、その特質を明らかにした。その際に、三人の女性像、及び白枠の縁が分離派館を暗示し、彼女たちが絵画、彫刻、建築の諸芸術の統合を表し、全体として刷新や春を想起させる点を指摘した。しかしライズマンは、第一三回展のポスターにて分離派館を描く目的や分離派展とポスターの関係等を考慮しておらず、その解釈は十分とは言えない。本ポスターについて分離派館の建物の装飾に備わる多層的な意味、及びポスターと展覧会の関係、そしてモーザーによる有機的な、幾何学的な形態の扱い方を検討する必要がある。

発表者は、次のように考察を進める。第一に分離派展とそれに付随するポスターの関係を整理し、第一三回分離派展が従来とは異なる展示内容であった点を考慮して本ポスターの作品分析を試みる。第二に、ポスターの女性像の頭部が分離派館の正面と形態の上でも類似していることから、分離派館の建物に備わるギリシャ神話に関連するモチーフと本ポスターの女性像との関係を考察する。その際に、アポロンとダフネのような人物像の手足が別の形態に変化する性質に着目する。モーザーは、本ポスターを制作する以前に分離派の機関紙『ヴェル・サクルム』の挿絵として同様に植物と人物像が一体化したモチーフを制作した。例えば、手足が植物に変化した人物像が挙げられ、そうしたモチーフは力強い生命力を秘めている。こうした作例を踏まえた上で、有機的な形態である女性像と幾何学的な形態が共存している本ポスターの特質を提示し、モーザーの画業にて改めて位置付ける。

以上の考察により、モーザーが試みた本ポスターでの描写表現や構図の特徴が明らかとなる。そして、本ポスターが、第一三回分離派展の総合芸術における新たな取り組みに関与している可能性を提示する。